

図書館だより

HGU Library

library.hgu.jp

vol.226

April 2022

社会に出ることを考える

「研究」が拓く新しい人生

経営学部経営学科教授 佐藤 大輔

時空を捉えて生きる―「過去・現在・未来」×「自己・他者・社会」

経営学部経営学科教授 内藤 永

ジェンダーから社会を考える

経済学部地域経済学科教授 中園 桐代

本のおかわり 『すらすら読める風姿花伝』 林 望 著

「研究」が拓く新しい人生

経営学部経営学科教授 佐藤 大輔



SATOH Daisuke
神戸大学大学院経営学研究科博士課程
後期課程（マネジメントシステム専
攻）修了。博士（経営学）（神戸大学）。
専門は経営学、組織理論、マネジメン
ト論。研究テーマは組織における実践
と創造性に関する研究

みなさんは勉強ができますか。また、勉強は好きでしょうか。

大学生であれば、少なくとも受験や高校時代の成績によって勉強の成果を評価されてきた経験があるはずです。だから、たいていの場合、勉強が「得意だ」とはいえなくとも「そこそこならでできる」くらいには答えられるかもしれない。また、勉強が好きかという問いに対しても、「好きだ」と答える層はかなり限られているかもしれない。嫌いだというほどでもないのに、やれと言われればやる」くらいに答える方が多いんじゃないでしょうか。

勉強力とは何か

では、勉強できること、そのために勉強が好きであることはどの程度重要なのでしょう。もし、勉強がすべて（において重要）というのであれば、あなたたちの人生はほぼ確定していて、入学した大学の偏差値レベルと同じような評価を一生受け続け、その程度の豊さを得ることで人生を終わらせることになるはず。このこ

とが良いことだと感じるかどうかは個人差がありそうですが、少なくとも私はそんな（先が読めてしまう）人生はつまらないと思うのです。

高校までの教育と大学での学びは、似ているようにも思えて、実は全く異なるものです。よく考えてみてください。高校までは教科書があったて、そこに書いてある理論や理屈を使えば必ず全員が（同じ）正解に至ることができます。しかも教科書は、そこに載っていることを必ず全員が理解できる、という前提で作られています（頭のいい人しか理解できない教科書なんてありえない！）。それゆえ、どんな人でも努力さえすれば必ず正解に至ることができると考えられています。それが押しなべてすべての子供に勉強が押し付けられる根拠となっています。つまり、勉強ができるということは、（厳密には）能力が高いとか頭がいいとかということとは少し異なっていて、とにかく頑張れること、単に努力し続けられることを指していると考えられるわけです。勉強ができる子はある意味従順で、やるべきことを淡々とやる冷静なイメージがないで

しょうか。まさにそれが勉強力なのです。

高校までとは異なる大学での学び

では、大学ではもう新しい知識を獲得する必要はないか、といえそうですがありません。ただ、大学では勉強としてだけではなく、研究としての知識の獲得が重視されるようになります。大学に入りたての頃は概論をはじめとする講義がたくさんあって、むしろ高校よりもいろいろ勉強しなければならぬ場面があります。ただし、学年が上がると研究室とかゼミナールとかいう集団に所属して、専門的な研究を行うようになるのが一般的です。

研究といっても「深く勉強する」ことなんてしょ、と思うかもしれませんが。それ自体は間違いではありませんが、研究という取り組みの重要な点は、勉強とは異なり自分なりのアウトプットが求められる点です。だから、深く勉強したとしても自分なりのまとめ方や、自分なりの問いに対する仮説を構築したりする取り組みをしていなければ研究にはなりません。大学では勉

おすすめの本



『北海道の業界地図 2022-2023』

北海道新聞社 編

協力：北海学園大学経営学部佐藤大輔ゼミ
(北海道新聞社 2021年)

強の成果をまとめたものをレポートと呼び、研究の成果をまとめたものを論文と呼びますが、もちろん論文の方が圧倒的に高く評価されるのです。

勉強と研究の違いは、このように自分なりのアウトプットがあるかどうかの違いだけにとどまりません。勉強は知識（理論や理屈）を先にインプットして、それを後で使うことが想定されています。のちのち役に立つように今勉強しておきましょう、という発想です。一方で、研究は行為の中でうまくいかない（正解が役に立たない）場合に、必要な知識を事後的に探して学ぶか、自分なりの知識を新たに生み出すことが想定されています。勉強は「先に知識、後で行為」なのに対して、研究は「先に行為、後で知識」なわけです。

勉強が嫌いでも研究は楽しい！

とはいえ、勉強も研究も、結局は知識を習得しなければならぬわけで、それが苦手なんだと思う人もいます。確かに、知識を得るという取り組み自体が苦手だから勉強が嫌いだと思っている人は多いかもしれません。実は、これには理由があります。勉強で先にインプットしなければならぬ知識は、自分の経験とは無関係の他者によるものです。しかも、理論はこうすれば解決するはずだという「答え」を教えてくれますが、そもそもそれを解決したいと思うための「問い」が自分に欠如していることがほとんどです。困ってもないのにこうすべきだとアドバイスされても有り難くないわけで、そもそもなんでそんなことを学ばなければならぬのか理解もできないですよ。勉強が嫌いになるわけです。

一方で、研究は行為の中で自分なりの「問い」が見つけれられていて、実際困っていることについて知識を自分で探に行きます。もし既存の知識の中に答えがなければ、自分で作ったり、既存の知識をカスタマイズしたりします。いずれの場合でも、自分が実感している「問い」に対する答えとして知識や理論が提示されるので、なるほどと納得することができるのです。

結局、理解の仕方には2つのパターンがあるという話なのです。実感のない答えを正解として押し付けられる勉強では、「理屈上の理解」しか成し遂げられません。一方で、自分の違和感

や問いに対して答えが提案される研究では、「納得の理解」が成し遂げられます。重要なのは、前者は学んでも使わない（使いたいと思わない）ので、行為につながらないことが多いのに対して、後者は自分で知りたいと思ってたどり着いた答えなのですぐにでも使いたいと思う点です。つまり、勉強は行為につながらにくい受動性を促してしまうのに対して、研究は行為につながらやすい能動性を促すわけです。

研究が拓く将来がある

このような勉強と研究の違いは、みなさんの人生が大学の偏差値とは無関係に素晴らしいものになる可能性を示唆しています。受験で報われるような勉強力は、実感のない答えを飲み込める力にすぎず、それは受動的な姿勢しか導きません。大学から始めることになる研究は、おそらく多くの人にとって初めてかもしれない学び方かもしれませんが、それは自分の積極的な行動を後押ししてくれます。だからこそ、ぜひ高校までの勉強やその方法にとらわれないでほしいのです。社会や実践のフィールドに飛び込んで行為し、その経験の中から問いを見つけてみましょう。その問いが知識の探求を促し、次の行為を生み出すという好循環が始まるはずですよ。その結果、みなさんの知識はどんどん増え、やりたいことが無尽蔵に生み出されていく。そんな人生の始まりに今立っていることを、ぜひ知ってほしいと思います。

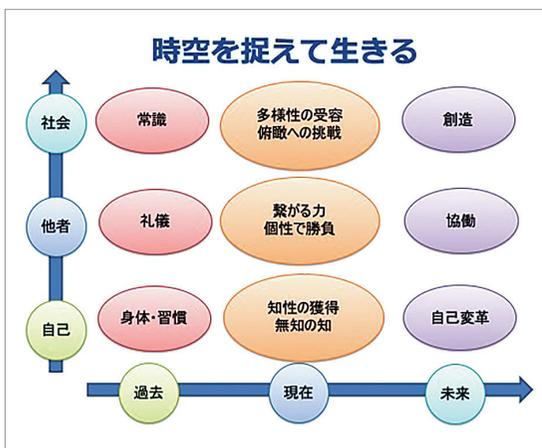
時空を捉えて生きるー 『過去・現在・未来』×『自己・他者・社会』

経営学部経営学科教授 内藤 永

グローバル化、多様化する時代に、社会に出て仕事をしていくには、それなりの準備が必要で。親世代は海外に出ていくことがかなり特別なことでしたが、格安航空券が発達した今は、気軽に海外旅行することができ、短期留学やワーキングホリデーで海外に行く学生も大勢います。学生として海外に出かけていく分には、寝泊りと食事さえどうにかなれば、日本の感覚のまま出かけても通用してしまうことが多々あります。しかし、海外の人と仕事をする、交流する、住む、となると日本人の感覚が通用しません。予定通りにヒトが集まらない、コトが進まない、モノが届かないことが日常茶飯事です。説明を尽くしてもこのような事態が起きてしまいますから、日本社会のように「いつものあれで!」、「なんともなく分かるでしょう」という文脈を共有するやり方では上手くいきません。異なる背景、考え、行動様式の集合体であるグローバル社会で生きていくためには、先ずは、自分の考えをしっかりと持ち、理解されるかも分からない相手とコミュニケーションを図っていくことが大切になります。

グローバル社会に出ることを考える際に、もう一つ見逃せないギャップがあります。今の日本の教育現場は、すべてが上手く行くように懇切丁寧に整える指導が行われています。現実の社会では上手くいかないことやミスコミュニケーションが多発するのですが、教育の現場では「転ばぬ先の杖」と言わんばかりの丁寧さで生徒や学生と接する場面が増えました。このように、よく耳を傾けて相手の意向を理解し、自分の意向を相手に伝えるという作業を簡略化すると「言われたことしかない」ということが起きてしまいます。日本社会とグローバル社会の間もそうですが、教育現場と日本社会の間には同じように大きなギャップがあるのです。グローバル社会に出ていくためには、この二重のギャップを乗り越えて行くための準備が必要です。

その準備として一番大切なのは、時空を捉えて生きること、と私は教えています。『過去・現



在・未来』の時間の流れ、『自己・他者・社会』の空間の広がりや常に念頭においた日々を過ごすことです。あまりに当たり前のことで、「分かっている」と思っている人がとても多いのですが、実際に、時空を認識し、意識して生活している人はとても少ないです。



NAITO Hisashi
東北大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）（東北大学大学院）。専門は English for Specific Purposes (ESP)、英語学。研究テーマは職場で使う英語の言語的特徴 (English for specific purposes)。

おすすめの本

《自己》



『頭がよくなる思考術
プレミアムカバーブラック』

白取春彦 著

(ディスカヴァー・トゥエンティワン 2018年)

《他者》

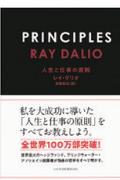


『他者と働く―「わかりあえなさ」
から始める組織論』

宇田川元一 著

(NewsPicks パブリッシング 2019年)

《社会》



『PRINCIPLES
人生と仕事の原則』

レイ・ダリオ 著 / 斎藤聖美 訳

(日本経済新聞出版社 2019年)

自己の過去・現在・未来・グローバル社会では自分が何者であるのかを語れることが基本です。その前提として自己を確立することが不可欠です。「自分探し」をしても自分は見つかりません。身体に良い食生活、良い習慣を家庭生活で身に付け、大学では個性を磨くために様々な経験をして学びを深めます。そうした基本を踏まえて未来に向けた自己変革を目指していきます。

他者との過去・現在・未来・グローバル社会では確立した自己があつて初めて他者とのかわりが出てきます。相手の存在を尊重するという基本的な礼儀を身に着けた上で、他者と繋がります。他者はなぜ自分と繋がるのでしょうか。そこに他者にはない尊重すべき個性があるからです。個人として繋がることのできなければ真の協働はできません。「○○大学を出ました」、「○○企業に勤めています」の前に、「あなたは何者か」が重要です。大学時代には、できるだけ早い段階で自己を確立し、他者と繋がる訓練が必要です。他者と繋がるためには、自分が見たい

ように相手を見るのではなく、相手の立場や状況を相手の側から見るのが欠かせません。この第2の目、視点を持つる学生はとも少ないというのが日々学生と接する私の実感です。

社会との過去・現在・未来・他者が多く集まる先には社会があります。その社会には、特有の利害関係やルール、文化などがあります。それらは、自分が今まで生きてきたものとは大きく違う可能性があります。「常識」がまるで通用しないということを確認する必要があります。異なる常識を持つ社会の様子を俯瞰し、その違いを受容することがなければ協働することはできません。また、社会は大きな単位なので自分一人だけの力ではどうにもなりません。他者との協働を繰り返す中で、初めて、創造的な仕事ができるようになります。一昔前に、電車でお化粧をすることは是非が話題になりました。「空気を読む」という日本独特の言葉もあります。これらは他者の存在が意識されていない現象と見えています。日本の「おもてなし」も自分たち

が良いと思うことをしているだけで、決して他者や多様性に富んだ社会を尊重するものではないと考えています。自分(たち)のやり方が相手にとっても良いやり方とは限りません。自分たちが作った最高の製品、商品は、日本社会の文脈で最高であったとしても、グローバル社会の文脈では無価値であることは多々あります。品質も機能もサイズも価格も、それぞれの社会では最適解が大きく異なる場合があるからです。自己を確立することと、身勝手な自己主張をすることは、似て非なるものです。空気を読んで自分が我慢し、相手に合わせることも決して良いものではありません。自己の主張と、他者の主張や置かれてある状況をよく確かめ、双方にとってより良いものを都度創造していくこと、創造の繰り返しができることが、グローバル社会で活躍する上で必要なことです。

現在、世界中がコロナ禍にあり、海外に出ていくことは困難ですが、グローバル社会での活躍を夢見る若者には、コロナ明けには、ネットで情報を集めて満足するだけでなく、留学や海外インターンをしてほしいです。何よりも大事なのは、現地の人たちと交流して何かをすることです。協働の経験をする中で、世界にはいろいろな人がいろいろな考え方をして生きていることが分かると思っています。その上で、双方にとって益のある互惠関係を結ぶことが社会で活躍する上で非常に重要になります。

ジェンダーから社会を考える

経済学部地域経済学科教授 中園 桐代



NAKAZONO Kiriyō
北海道大学大学院教育学研究科後期博士課程単位取得満期退学。博士（教育学）（北海道大学大学院）。2012年本学経済学部教授。専門は社会保障論、ジェンダー論。研究テーマは女性労働者の就労と育児を支える支援の研究。社会保障論担当。

ジェンダーとは何か？

生物学的な性差ではなく、社会的文化的な性差をジェンダーという。「ジェンダー平等」はSDGsの目標にもなっており、2021年末の流行語大賞ではトップ10にノミネートされた。「ジェンダー格差」を学生が感じる事は少ないと思う。それは、学校では「成績」が学生の評価の指標であり、男性か女性かは問われないからだ（某医大では入試で女子学生に不利な採点を行い社会問題となった）。しかし、学校を卒業し働き始めると、家事、育児負担が重い（子どもを生まない可能性があったとしても）女性は常に二流の労働者として評価される。世界経済フォーラムが2021年3月に公表した各国における男女格差を測るジェンダーギャップ指数で、日本の順位は156か国中120位と先進国の中でぶつちぎりの最下位だった。特に格差が大きいのは経済の分野である。「令和2年賃金構造基本統計調査の概況」によると、男性正社員の平均賃金は35万円、女性は27万円と大きな開きがある。同じ正社員であるのに月8万円（！）差がある。

では、ジェンダーについて勉強するにはどんな本が最適か？ 上野千鶴子『家父長制と資本制マルクス主義フェミニズムの地平』（岩波現代文庫2009年）といった古典もあるが、もう少し気軽に読めるものを紹介したい。

コロナ禍とジェンダー格差

「ジェンダーなんて一部の女性が騒いでいるだけ」と思っている学生は、統計などの情報で現実を知るところから始めて欲しい。コロナウイルスの感染拡大は私たちに大きな影響を与えたが、女性と男性では違う。「シーセッション（女性不況）」と言われるように、コロナ禍は女性の雇用、特にサービス業等の非正規で働く多くの女性に大きな影響を与えた。令和3年版『自殺対策白書』（厚生労働省）では、男性の自殺者は前年と比べ減少したが、女性は増加したと報じている。厚生労働省では、コロナによる労働環境の悪化が女性自殺者の増加の一因とみている。また、令和3年版『厚生労働白書』（厚生労働省）では、コロナ禍による女性の非正規雇用の大幅な減少と休校措置などで家事・

育児負担が増加したことから、負荷が女性に偏っていることを明らかにした。

女性は王子と結婚したら幸せか？

もし、ジェンダーについて勉強したいと思う学生がいるなら、私がまずお勧めするのは若桑みどり『お姫様とジェンダー』（ちくま新書2003年）である。この本ではデイズニーのアニメのプリンセス・ストーリーを題材に、童話にはどんな意味が込められているのか、いつの間にか私たちが侵食している「女らしさ」「男らしさ」を考える本である。

例えば、デイズニー・プリンセスの「シンデレラ」。彼女は、白人のフロンド女性、美人でスタイル良し、家事能力はバッチリ、自分からは主張せず超控えめ、ガラスの靴を落としてさりげなく自分をアピール；である（ガラスの靴の意味は本を読んで欲しい）。彼女は、金持ちと結婚できる「ブ口彼女」なのである。このような女性像が絵本やアニメ、商品として日常生活に溢れ、「経済力がある男性を見つけて結婚するのが女性の幸せ」とい

社会に出ることを考える

おすすめの本



『家父長制と資本制
—マルクス主義フェミニズムの地平—
上野 千鶴子 著
(岩波現代文庫 2009 年)



『お姫様とジェンダー
—アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門—
若桑 みどり 著
(ちくま新書 2003 年)



『アリーテ姫の冒険 (復刊記念版)』
ダイアナ・コース 著
グループウィメンズ・プレイス 訳
横浜市男女共同参画推進協会 監修
(大月書店 2018 年)



『働く女子の運命』
濱口 桂一郎 著
(文春新書 2015 年)



『シングルマザーの貧困はなぜ解消されないのか
—「働いても貧困」の現実と支援の課題—
中岡 桐代 著
(勁草書房 2021 年)



「アッシュエンブッテル
—灰かぶり姫のものがたり—
グリム兄弟 著 / 大久保 ゆう 訳
(青空文庫)

うメッセージが垂れ流されている。そして、現実の日本の社会保障制度には年金保険の3号被保険者など専業主婦を優遇する制度もある。(一方の男性は、女性と子どもを養う役割を担うことが義務となる)。

ディズニー・プリンセスとは違うシンデレラの物語もある。グリム兄弟『アッシュエンブッテル』灰かぶり姫のものがたり(『青空文庫 大久保ゆう訳』)では、彼女は大分「あざとい」女性であるが、王子と結婚する点は同じである。一度読んで欲しい。

他力本願のプリンセスにうんざりした人は、是非ダイアナ・コース『アリーテ姫の冒険』(大月書店 2018 年)を読んで欲しい。このプリンセスを知っている人は少ないだろう。彼女はシンデレラのように家事に動んでいるわけではない。アリーテは、勉強が好きで、賢く、自立心が強い。彼女は、持参金目当てに、父である王に無理やり結婚させられた悪い魔法使いを自分で倒し、自由の身となる。自立したプリンセスなのである。そして、アリーテ姫は仲間と協力して難題を成し遂

げる。

現代日本で働く女性を取り巻く課題

さて、夢と魔法の王国ではない今の日本で女子が生き抜くには、何が必要なのだろうか? プリンセスを養ってくれる王子もいないので、女子は自分で働いて稼いで自立するしかない。しかし、先に述べたように日本の男女の賃金格差は大きい。このような差が何故生じるのか、その原因を解説してくれるのが濱口桂一郎『働く女子の運命』(文春新書 2015 年)である。

濱口氏によれば、日本の正社員はメンバーシップ型雇用であり、職務、時間、働く場所の決定を企業に売り渡す。その結果として非正規よりは相対的な高賃金を約束される。一方の非正規は職務、時間、働く場所は限定されるが、最低賃金に近い時給制の給与のため生活賃金(家族を養うことのできる賃金)を稼ぐことは難しい。この正社員or非正規という究極の選択を私たちは迫られている。そして、出産や子育て、介護といったライフベ

ントを迎えた時に、多くの女性は正社員であることの負担に耐えられなくなり、失職することになる。一方の男性正社員は、「24時間戦えますか」状態の社畜になるしかない。このような働き方をどう変えるかべきか、考えて欲しい。

働く事で自立しなければならぬのは、シングルマザーも同じである。私が昨年出版した『シングルマザーの貧困はなぜ解消されないのか』(働いても貧困)の現実と支援の課題(勁草書房 2021 年)では、シングルマザーが正社員・非正規ともに長時間働いているにもかかわらず経済自立できない実態とその要因を明らかにした。コロナ禍で政府はシングルマザーに対して一時的な給付金を出したが、本当の支援は何か考えて欲しい。

ここに紹介した本だけでなく、今日、ジェンダーに関する良質な書籍や映画、ドラマ、漫画などが沢山発表されている。ジェンダー平等が進むと男性が損をして女性が得をするという考えは誤りである。性に問わず誰もが生きやすい社会にジェンダー平等は連なっている。

